

# 児童館に集う子ども達

高橋 あき子

今日も児童館はにぎやかだ。

玄関のドアを開けるとすぐ、床（とこ）を囲んでベーゴマをまわす五年生たち、くつきボールを力いっぱい的に目掛けて投げ合いをしている三年生グループ、小さな玉突き台で遊ぶ五年生の女の子たち、布ボールでサッカーをやっている六年生や紙工作をしている一、二年生たちも奥に見える。児童館

に活力がみなぎっている時である。

たまに、子どもが少なくて館内が静まりかえつているような日があるが、そんな時の児童館には人気のないうらぶれた劇場のような虚ろなわびしさが漂う。子どもたちもきっと、そんな日の児童館には、入るのを躊躇するような雰囲気を感じるのではない

どういうわけか、学校は建物だけでも『学校』といふ感じがするけれど、児童館はたとえひそかにでも、また、歎声が響きわたつていればなおさらだが、子どもがそこに遊んでいて初めて生きた『児童館』らしくなるような気がする。

とはいっても、子どもが元気に遊ぶということもこの昨今では、なかなか大変である。児童館に来たら、思う存分遊べるだろう、なんていうわけにはいかないのが残念ながら現実だ。子ども自身が遊び方が下手だと、遊びを知らないとかいうのは、また別の大きな問題だが、その前にも大きな障害が結構ある。

都内の児童館の多くは、保育園や敬老館、その他の社会施設等と併設で、児童館は必ず、二、三階に追いやられてしまつてゐる。だから、玄関までたどりつくのに階段通路を何回も曲がつて登らなければならぬなんていう所も少なくない。そんな所は児

童館の前をたとえ通つてもにぎやかな声など聞こえないから、子ども自身も「きょうは児童館であそぼう！」といった意気込みがないと、ちょっと寄つてみようなんていう気楽な気分では入りにくいなんていうことも結構あるだろう。

その上最近は、近隣の住民から、中で遊ぶ子どもたちの声や、ピアノの音、ボールの跳ねる音が騒がしいという苦情が、方々の児童館に持ち込まれるようになつた。子どもの遊び方が以前よりダイナミックになつたとか、児童館を利用する子どもの数が増えたというわけではないので、たぶんに、密集化したり高層化したりしている住宅事情や、週休二日制などの生活スタイル、あるいは高齢化などが影響しているのではないかとも思われる。

去年のちょうど今ごろの事だつたろうか、電話が鳴るので、

「はい、児童館です」

と勢いよくすると、

「いつも言つてゐるんだけどねえ。広場でボール遊びは、やらないでくださいよ！ あれ、はねて、うるさいんだよ。」

と、不機嫌な口調で怒鳴る抗議の声である。

私はあまりの理不尽な物言いに呆気にとられてしまい、ボール遊びをしているのは団地の子どもで、児童館利用中では無いことなど思い起こせず、ひたすら低姿勢でお詫びをしたのであった。

その広場は、都営団地の真ん中にあって団地の集会所が一隅にあるほかは、周囲を成長した木々にかこまれ、児童遊園につきものの既設遊具が全くなくて、いかにも子ども集団の遊び場にふさわしく見えた。私は、その児童館に着任してまだ間もないころで、こんな良い広場がすぐ隣にあって恵まれた児童館だと思っていた矢先だった。だから、その電話の

後暫くは、なんて自分勝手な大人かと憤懣やるかたと勢いよくすると、

ない気持ちがつのる一方だった。

しかし、冷静になつてみると、日中とはいえ、子どもたちの歓声やボールの音などは、建物に反響したり壁をはいのぼつたりして確かに神経を苛立たせることがあるだろうと思い及んだ。だが、だからといって、子どもの遊びをやめさせてよいものか。せっかく良い広場があるのに子どもが遊べないのは勿体ないのひとことであった。

子どもにとつても外で伸び伸び全身を使って飛び回り、大勢の仲間といつしょに仲良く遊ぶ機会は何よりも大切である。そして、一人でも多くの大人にそのことを理解してもらいたくもある。

それから、電話の主が居住する団地自治会と、様々な形での交流、情報交換をはかり、児童館の広場利用にも工夫をしたりしたのだが、そのかいあってかどうか、その後苦情電話はなくなつた。

この広場事件は、放つておいたら子どもの遊び場がなくなってしまう、という危機感を私たちに抱かせた。最も考えさせられたのは、広場で遊んでいる子どもたちに向かつて『うるさいから静かにしない』と、大人が直接注意しなかつたという点であった。

近くに住む、おじさんが出てきて、『ボールを

ここで投げるな!』と言つたら、一旦は逃げて、またしらんぶりして始めるか、二度とやらないか、子どもによつて反応は様々だろうが、少なくとも、いろいろと考へる機会になろう。そして児童館の職員が、間接的にそのおじさんの言葉を伝えるより、何十倍も鮮烈に感じどるものが有るに違ひない。

子どもにとって、直接大人に話し掛けられる体験は大きな出来事だ。私たちだつて子どものころ、ボールを庭に入れて怒鳴られ、ただ遊んでいただけなのに! と、大人なんて勝手なんだからと憤慨した。

たことなど数知れずある。そのことをきつかけに、あそこの家の近くではこうしよう、ボール遊びはあつちへ行こう、などと、遊び場や遊び方を気にするようになった。そしてまた、世の中にはいろんな人がいると感じたり、言わば世間というものを知るきっかけも、そんなところにあつたといえるかもしないのだ。

ところで、もっぱら児童館事業について語る時に使つてゐるのだが、『地域との連携』という言葉を聞いたことがあるだろうか。ひらく言えば、地域ぐるみで子どもの幸せを守る、その活動拠点に児童館がなるうということである。そのためには、地域住民による運営協議会を設置したり、地域イベントを企画したりと、様々な取り組みが行われている。

それはそれでよいが、実は、地域ぐるみで子どもを育てるというのは、褒めるにせよ叱るにせよ、大人が子どもに正面切つて付き合うということにつき

るのではないか。子どもに、「うるさい！」と怒鳴り、「なにやつてるの？」と話し掛け、「危ないからそんな所へ行つちゃいけないよ」と注意し、「こんにちは」と声をかけてくれる大人に見守られて育つことが、子どもの成長にとって、非常に大切で必要なことだといえば、きっと、誰も反対しないのではないかと思うのだが、実際は、大人が皆そうしてくれるとは限らないところが難しい。

さて、子どもが元気にあそぶのが難しいという例の一つとして、スーパー・マン事件をあげてみたい。男子も六年生くらいになると、今まで「はーい、わかった！」なんて言つて、職員の言うことをきいていた子どもも、「そんなのしんねえよ！ おれじやねえよ！」などと何にでも逆らうようになる。

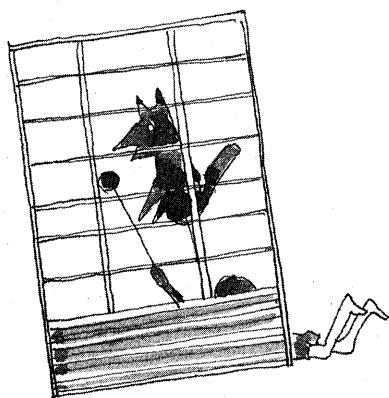
暫く姿を見せなかつた子どもに、

「久し振りじやない！ 長谷川くん」

などと、声をかけると、

「児童館なんてあほくさへでさー まつ、かわいそ  
うだから来てやつたよ」

なんていう言葉が返つてくる。



ある時、その長谷川くんが闘いごっこを始めた。

その当時、児童館では闘いごっこが流行っていたのである。二手に分かれて闘うのだが、参加資格はなんらかの手製の武器をもつことで、それは、新聞紙を丸めて金銀の紙をはりスチロール皿の鏃をつけた剣だったり、紐の両端に丸めた新聞紙をしばりつけた変形ぬんちやくだったり、ダンボールを切り抜いた桶を手にしたり、様々であった。長谷川くんも、

ダンボールで作った短剣を手に加わったのだが、な

んといつても庄巻は、背中に翻る長い黒マントであつた。丁度夏休みの終わり頃で、お化け大会に使つた大きな黒ビニールを工作材料として出しておいたのだが、それを利用して肩から足もとまでの背中にはためくマントを作つたのであった。その真ん中に○がくつきりと水色クレヨンで描いてあり、実にかつこよく見えた。それからは、児童館では毎日

マント作りが大流行となつた。皆、イニシャルや稻

光などそれぞれオリジナルマークを真ん中に描き、スーパー「マンゴ」こと名前もついて、遊びもおおいに盛り上がつていつた。

長谷川くんも、それからは連日来館して嬉々としてスーパー「マンゴ」に加わつていて、ある日ぱつたりとその遊びをやめてしまった。原因は明々白々であった。同級生の男子グループが来館して、

長谷川くんを見ると、

「ばつかみたい！」

と、言つたのである。だから、職員がその同級生を厳しく注意した後で、長谷川くんにまた遊ぶようにといくら促しても頑として動かずじまいとなつてしまつた。

これは、子ども自身がと自己規制して、遊びたいという自分の気持ちを押し殺してしまつたケースである。

遊びたいという意欲をまず触発して、やりたいこ

とは、危険で他人に迷惑をかけることでなければ、なんでも実現させてあげよう、という姿勢で児童館での遊びを育てていても、こんな形で遊びが阻害されてしまうのは、まことに無念というほかない。

スーパーマンごっこを馬鹿にした子どもたちも、本音でそう言っているのかというと、そうでもないのだ。むしろ、いっしょに遊びたいのに素直に言えないか、相手を侮辱していることに気がついていないか、それがいけないことだから慎まなければいけないという気持ちが育っていないのである。

果たして、きつくなられた同級生グループは、マントこそつけないが闘いごっこを独自に始め、さまざまな武器を作ると、一斉に外へ出て行ってしまった。きっと自分たちの秘密の遊び場へ行つたのだろう。

」のように、子どもが元気に遊べない理由の一つ

には、子ども自身の心のなかに、無我夢中になつて自分をさらけ出すのをためらつたり、熱中するのを恥ずかしく思つたりするような心理的な束縛があるように思われる。

本来、遊ぶということは、なにものにも縛られず自由に創造的に活動することだ。子どもたちが、もつともっと自分の好きなことに素直に夢中になつてどこでも、誰とでも楽しくあそべるようになってほしいと切に願う毎日である。

（東京都葛飾区立亀有児童館）